

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2011年9月 NO.163



[もくじ]

- 2～3 高知に感謝! 友と家族に感謝! ～ふるさとの絆と心の友～…篠田哲志
- 4～5 幡多の研究発表会「はたのおと」…山下慎吾
- 6～7 「水球不毛の地」からの出発…徳田毅
- 8～9 This is 土佐弁…リサ・ヤスタケ
- 10～11 言葉の現場から29「象は鼻が長い。」のなぞ…広井護
- 12～13 高知市文化振興事業団7月～8月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン: 「おつきみ」 見元佑衣

(財)高知市文化振興事業団



篠田 哲志

高知に感謝！ 友と家族に感謝！

～ふるさとの絆と心の友～

「ふるさとは遠きにありて思ふもの。そして悲しくうたふもの」という言葉は室生犀星の詩の一節であつたと思う。この詩の一節は中学校時代の親友が中学を卒業し大阪に集団就職した直後にもらったはがきの一文として、いつまでも心の中に残っている。

私には中学時代何人かの親友がいたが、今でも親友として付き合う友が二人いる。彼らと私を含めた中学時代の思い出は、不思議と故郷の山々、満天に輝く星空、小川に乱れ飛ぶ螢の群れ。そして母校の中学校は、白砂青松の太平洋に面した県立公園の一角にあり、柵や壁のない本当に自由闊達な雰囲気の校舎であつた。

その大方中学校での三年間、私は勉強が出来てスポーツはまあまあ、H君は勉強はまあまあ、あだがスポーツは出来、S君は勉強はまあまあだが（本人はやれば出来たと口達者では有るが）、スポーツや遊びはOKの三人であつた。でもいつも悩みの種はS君であつた。それぞれが十五歳の卒業式に、私とH君

十一歳になった私は、誰にも迷惑をかけぬどころか家族や周りに迷惑をかけた放しの呑み方となつており、死を賭してまで教えようとした父の教訓は完全に無となつている。その父親について、H君が私の結婚式の祝いの席で披露した時、私は勿論母親までがお祝いの席にふさわしくない大きな涙を流した事もかけえのない親友だからこそ出来た祝辞だと思つている。

海酔候（ゲイカイスイコウ）鯨が海で酔つて候」という、いくら酒を呑んでも良いが決して他人に迷惑をかけるない呑み方をしろ！つまり、鯨は太平洋の海で酔つ払つても誰にも迷惑はかけない。そういう呑み方を男はすべきだ！という父親の教えは還暦を過ぎた今でも、私の心の中にしっかりと残つてはいるが、その当の父親は私が大学二年の頃、朝酒が原因であつという間に昇天し、六

その後、H君もS君も良き伴侶を得、子宝に恵まれ大人としての現実の生活に明け暮れるなか、年賀状のやり取りだけの付き合いとなつた頃、H君とS君は本気で大人の喧嘩を起し絶縁状態となり、故郷を絆とした私達三人の心のつながりも切れてしまつた状況であつた。その後三十年近く音沙汰の無い状況の中、絶縁状態であつたH君とS君が一緒に働いている話題や私が脳梗塞で生死を彷徨うなかで彼らが心配してくれてる話が舞いこむ内に、どうしても彼等と一緒に、子

は高校進学が決まつていたが、S君は中学校を卒業して大阪に就職することになった。その後、私とH君は別々の高校に進み、私はオートバイに夢中となり、H君は高校野球に熱中し女子高校生の憧れの的となつたが、大阪に就職しマイル職人を目指して修行するS君とはいつの間にか疎遠となつた。ある日、ふと手元に届いたハガキの一節が、前述の「ふるさとは遠きにありて思ふもの」というなんとなく落ち込み風の便りであつた。



も無かつたが、十五歳の友は遠く離れた大阪で辛く厳しい修行をしながら、故郷で過ごした楽しい日々や青くなだらかな山々、そして目の前に太平洋を望む白砂青松の海岸の思い出をひとり寂しく心の支えとしながら、親友の篠田ならこの切ない気持ちからわかってくれるだろうとの思いからハガキを出したと思うこの頃だが、当時の自分は日々の忙しさに紛れて返信の便りを書いたかどうかさえ全く記憶に無い若き日の悔恨事である。（許せ友よ！若い頃はよくある事だ！）

その後、三年が過ぎ去り、大学進学の頃H君は家庭の都合で熱中した野球を諦めてS君と同じマイル職人の道を目指して大阪へ、私は大学進学で神戸へと、不思議な縁で関西地区で再結集し、歌声喫茶などで故郷の歌（南国土佐を後にして）を歌いながら青い空青い海の高知を懐かしく心に浮かべ、お酒の味を少しずつ覚えた青春時代であつた。

お酒といえば中学・高校時代から嗜んだが、S君がウイスキーの飲み過ぎでアルコール中毒状態に陥つた時、私とH君の二人で水道の水を頭からかけて死にそうになつた（死にそうにしてしまった？）記憶も鮮明である。この時の教訓がやがて「鯨

供時代や青春時代に還つて故郷の良き思い出を語りあいたいという強い思いが携帯電話のボタンを押させることになり、今はタイムマシンに乗つたかのように、子供の頃の三人状態に戻り現在に至つている。

先日は、突然H君から携帯に電話が入り、「今、S君と呑んでいる。ところで篠田の血液型は何型だった？」というたわいの無い電話が来たり、この度もこの原稿の為、二人の了解を取り付ける電話をしたりしながら、はや三年も逢つていないことに気付き、「故郷高知への思い」の原稿を書く中で、近い内に東京から大阪に行くので、必ず三人で会おうと約束した次第である。



き続けています。
故郷高知ありがとう。

しのだ てつし

一九五〇年 黒潮町（旧大方町）生まれ
入野小学校、大方中学校、中村高校、神戸学院大学卒業後、東洋証券株式会社入社、中村支店へ配属。二〇〇七年、同社代表取締役社長。二〇一一年、同社代表取締役会長就任、現在に至る。



その後三十年近く音沙汰の無い状況の中、絶縁状態であつたH君とS君が一緒に働いている話題や私が脳梗塞で生死を彷徨うなかで彼らが心配してくれてる話が舞いこむ内に、どうしても彼等と一緒に、子

その頃私は、高校に入学し勉学に励み、オートバイを乗り回しながら新しい友達も沢山出来、忙しい日々を過ごしていた。したがって故郷の山や川、白砂青松に囲まれた中学時代の学び舎など全く思い出す暇

幡多の研究発表会「はたのおと」

山下 慎吾



はたのおと

二〇一一年二月、幡多で研究発表会「はたのおと」が共同開催されました。案内文は「高知県西南部に位置する幡多（古くは波多）地域。高い森林率を誇る山々、美しい多くの川たち、黒潮があらう海辺、本気で美味しい食文化、独自の柔らかさをもつ言葉（幡多弁）、オープンで世話好きなどたち。この幡多の文化や自然にはまりこんでいる変なひとたちによる研究発表会「はたのおと」第一弾を開催します。幡多のことが気になる方、幡多で暮らしてみたいと考えている方、地元のことをもう少し知りたい方、身近な場所に広がる新しい世界を覗いてみませんか？ 懇親会もあります」。場所は宿毛文教センター。会の名称は、幡多（波多）のことを記録する「ノート」と地元から発信する「音」の双方の意味をもたせて「はたのおと」と。

発表者、発表タイトル、実施メンバーは次のとおり。

第一部 幡多を訪れて研究するひとたち

林田晋典（高知大） 松田川河口に出現する稚魚
河口拓紀（高知大） 河川の蛇行部に形成される淵と魚類
山崎拓郎（近畿大） 海洋レジャーへの転換とその持続性
高木基裕（愛媛大） ルリヨシノボリの遺伝的多様性
八木和美（法政大） 地域の内発的発展における環境NPOの役割

第二部 幡多にすみ地元を探索するひとたち

四万十高校自然環境部（四万十町） 四万十川流域のアミカ科幼虫
木村 宏（宿毛市・野鳥の会） カワウ・ウミウ 幡多の鳥たち
川村慎也（四万十市・教育委員会） 考古学からみた幡多
平野三智（四万十市・四万十楽舎） 四万十の美味いもんすごいもん
神田 優（大月町・黒美センター） 柏島における藻場の変化
岩瀬文人（大月町・黒生研） 黒潮生物研究所でやっていること
浜口和也（土佐清水市・竜串センター） 竜串のウミウシたち
山下慎吾（宿毛市・魚山研） 幡多の流域 瀬淵の名前―氾濫原という視点から―
開会挨拶：中西清一、司会：島中智子、時計係：戸梶優希、記念品：宮崎聖、おやつ係：遠近知代・多田さやか、広報・受付係：黒田厚・上村秀生・栗木裕史（宿毛市）、懇親会：国民宿舎椰子、主催：持ち寄り地図ネットワーク・魚と山の空間生態研究所・宿毛市、後援：高知大学理学部・黒潮生物研究所・黒潮美感センター・法政大学山岡研究室・日本野鳥の会高知・四万十楽舎・四万十高等学校・SwanTV・竜串タイピングセンター、助成：トヨタ財団地域社会プログラム

また、つながりが生じた幡多在住の人たちや、それを伝え聞いた人たちからすると、自分も興味を持って探求していることを表現したり、ほかに地元でどんな研究がされているのかを知りたいという欲求が生まれます。さらに、この双方が気軽に集いあえるような場を作ろうとすると、行政や民間や団体といった組織の壁を超えて、各個人の時間や手間や知恵を持ち寄る必要がでてきます。今回、このようなネットワークが相乗効果をもたらし、不思議な盛況になったのではないかと思います。

「自己組織化」という言葉があります。自己組織化とは、システムを構成している多くの要素間の相互関係のみに基づいて、システム全体レベルでのパターンが創発される過程を示します。例えば、砂丘にみられる美しい風紋、渡り鳥のみごとな編隊形成、細胞が高度な器官を形成する過程など、きわめて複雑でかつ高度なつくりをもつ構造がトップダウン的な影響をまったく受けずに完全にボトムアップ的に生じる現象を説明する考え方です。これまで、我々が経験する組織とは、階層的なピラミッド構造をしており、その構造を維持する情報や指令は大所高所

に立つ指導者から発せられるという人工的なものでしたが、近年では、自然界にみられる高度なパターン形成の多くは「自己組織化」で説明されているようです。もしかしたら、幡多には「自己組織化」が形成されやすい素地があり、この最先端かつ自然な考え方でとらえるべき興味深い現象が今わきおこっているのかもしれない。

今後は？

幡多には他にも多くの研究者・探求者がおられます。また、自然体験、ツーリズムネットワーク、間伐隊、自然再生、生産者マーケット、地産物の商品化など、さまざまな活動が互いに緩いつながりを持ちながら発生しています。それらの活動をされている方のなかには、すでに次の「はたのおと」で発表することを決めている方も。今後、第二回「はたのおと」開催に向けて、ゆっくりと楽しみながら緩やかにつながりながら準備が進んでいくことだろうと想像しています。



(C) RANDA M

(C) H. MAGLICH

(C) YAMASHITA, S

発表会は大盛況でした。実施メンバーと行政機関（宿毛市）とのスムーズな共催連携、上記の個人間ネットワークが発展した機能的な協力体制、興味深い内容満載の発表などが功を奏し、やや専門的な内容が含まれるにも関わらず、高校生から御年輩の方々まで百十九名の方々が参加されました。それに加えて「アミカの発見は何を意味するのでしょうか？」など計四十五題もの質問やコメントが寄せられました。現在は「ぜひ第二回をやってほしい。いつ開催するのか」という要望に応えるべく準備が進められています。

幡多には大学がない。ないからこそ面白い。

なぜこのような会が大盛況になったのか。その要因として、自然や文化について探求したい人達からすると幡多は魅力あふれる地域であること、幡多には大学がないことがあげられると考えます。つまり、ここで研究しようとする、地元の方の協力やアドバイスを得ながら、何度も訪れたり住みこんだりして自力で何とかしたいといけない。そこに独自性や個人対個人につながりが生まれます。



やました しんご

一九六八年 大阪市生まれ
小学生の頃から魚の研究をした
と考える高知大学理学部に。大学院
理学研究科を修了後、東京都や茨
城県つくば市にある研究所で日本
各地の流域やガンジス川などの自然
環境研究プロジェクトに従事。その
後、念願の高知に戻ってきた。博
士（学術）。魚と山の空間生態研究
所代表。独立行政法人土木研究所水
環境研究グループ招聘研究員。高
知工科大学非常勤講師。流域圏学
会理事。

「水球不毛の地」からの出発

徳田 毅



みなさんは「水球」というスポーツをご存知でしょうか？ ほとんどの方は「何か水の中でボールを使ってプレーする競技」という程度でしか認識されていない方は

には味わえません。この経験が、後に私の水球指導にかける思いの原点になりました。

高知県に水球の指導者として来たのは一九九八年、高知国体の四年前です。それまで高知県では水球チームは全く存在せず、まさに「ゼロ」からの出発でした。ある水球関係者からは「高知県は水球不毛の地ですね」とまで言われました。その「水球不毛の地」高知県に国体出場を目指し、水球を見たことも聞いたことも知らない子供たちが集まってくれるのか？ 国体に出場できるレベルのチームに仕上がるのか？ など期待と不安が入り混じっていました。そして迎えた初年度の講習会、実際に集まったのは、たったの二人だけでした。このままただ待っているだけでは選手は集まらない！ そう思い二年目からは中学生の水泳大会に出向き四位以下の選手（三位以上は競泳で期待される選手であるから）に一人ずつ声をかけ、夏休みには水泳部のある中学校に出向き、選手を勧誘していきました。その結果ようやく十人程度の選手が集まり、高知県で初めての水球チームが誕生しました。その選手

かりだと思えます。簡単に言ってしまうとその通りなのですが、実は水球は見た目以上にハードなスポーツで「キング・オブ・スポーツ」とも言われているほどです。

日本では知名度が低く、前述のようになんとなく知っているマイナースポーツの一つとなっていてます。しかし、この水球というスポーツは海外では非常にメジャーなスポーツであり、オリンピック種目でもあります。日本ではテレビでもあまり放映しないため知らない人が多いのですが、ヨーロッパではプロリーグがあり、年間何億と稼ぐ選手がいるほどです。

私が、この超マイナースポーツである水球と出会ったのは、中学三年生の頃でした。石川県出身で小学校低学年の頃から水泳を習い、中学生の頃には背泳ぎで石川県の大会で二位に入るほどの成績

私たちは三年後、高知国体に出場を果たすことが出来ました。

水球不毛の地から出発してから十余年が経ち、選手を集め、強化していく中で感じたことは、子供たちはとても「新しいもの好き」であるが、「飽きっぽい」性格だということ。性格は高知の子供たちだけでなく現代の子供たちによくある性格なのでしようが、一つのことをより深く追求する気持ちや、我慢強く毎日の練習をコツコツ頑張ろうという気持ちが薄く、何事も「広く浅く」で根気がなく、試合前にならないと練習に参加しない傾向にあります。しかし、私が興味深かったのはもう一つの「新しいもの好き」という性格です。この性格はマイナースポーツである水球にとってとても都合でした。

「水球のルールはよくわからないけど楽しそうだから一度やってみよう」と思って水球クラブに入ったらという子供が多く、その中で最後までつらい毎日の練習に耐え、残った選手が現在の高知の水球を支えています。水球はとてもハードなスポーツなので子供たちの中には練習がつらく、長続きし

でした。しかし、私の記録では全国大会出場には程遠く、このまま競泳を続けていても全国大会にすら出場できず、自己記録を更新するだけの競泳に満足しなくなりました。そこで出会ったのが水球です。その当時、石川県の水球は、高校にチームが一つあるだけで、ジュニア（小中学生）のチームがない状態でした。しかし、まだ北信越ブロックでは、どこの県も水球チームがない状態だったため、チームを作れば全国大会に出場できる状態でした。私はその「水球をすれば全国大会に出場できる」という甘い誘惑に乗ってしまったのでした。結果はもちろん一回戦敗退でした。しかし、私は「充実感」を感じていました。なぜなら、この水球という競技で全国というものが見えたからです。今までは石川県という中でしか経験しな

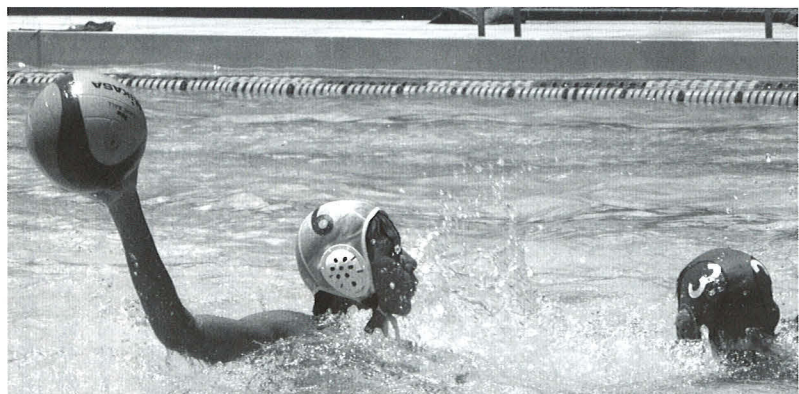
ないでやめてしまおう子供たちもいます。そのことから、私は段階に応じて、小学生は水球の「楽しさ」を知ってもらい、中学生は水球の「技術」を知ってもらう。そして高校生は水球で「勝負する」ということが大切だと感じました。

現在、高知県の水球は、ジュニア（小中学生）の育成に力を入れ、選手は八十名近く集まり全国大会に毎回出場しています。その結果、高校生のレベルもアップし、国民体育大会にも四国ブロック代表で出場できるようになりました。十四年前は「水球不毛の地」と言われた高知県の水球が今では四国で一番と言われるチームにまで成長したのも、ジュニアの育成に力を入れた成果だと思えます。

今後は、この高知の水球を四国で一番と言われるだけでなく、全国で活躍できるチームに築き上げることで、高知の子供たちに私が中学三年生の時に感じた「充実感」、水球を通して「全国」というものを経験してもらいたい。そう思いながら水球の指導に励んでいます。

かったことが水球を始めたことにより全国が見えたのです。高校進学を考えたときも、迷わず水球チームのある金沢市立工業高校を選びました。しかし、そこは父親が働いている職場でもありました。そうです、父親はその高校の教師であり水球の監督でした。

父は、大学時代に水球に出会い、石川県に帰って教員となり水球を指導するようになりました。今から思えばこれは父親の戦略だったのかもしれませんが、私はこの戦略の思うツボにハマってしまいました。同じ学校に父親がいて、それも部活動の監督というのには正直嫌でしたが、それ以上に水球が好きだったのでそんなことは関係ありませんでした。高校二年生でインターハイ・国体を経験し、高校三年生でインターハイベスト8、国体七位の成績で日本の水球チームがある日本体育大学に入学し、二〇歳の時にはジュニアワールドカップ（U・二〇）日本代表として世界の水球チームと対戦する経験をさせてもらいました。水球に出会えたことで全国だけでなく世界まで見ることが出来たのです。こんな経験はそう簡単



とくだ たけし

一九七〇年 石川県生まれ
日本体育大学大学院スポーツ運動学科修了後、専門学校教員を務め、一九九八年高知県に水球指導者として赴任。現在は、高知県立日高養護学校教員。高知県水泳連盟常務理事。

This is 土佐弁

リサ・ヤスタケ

「今日はこじゃんとぬくいね」と聞いたら何と思う？ 高知の人なら、「そうね、今日はとても暑いね」と考えることでしょうか。

しかし、高知の人でなければ、まず、「こじゃんと？」 変な言葉！ えっ？ とでも？ という意味？ へ〜」と知らない言葉につまづき、「でも、とてもぬくい」とはどういうこと？ ぬくいと言ったらそこまで暑いというイメージはないから、それに、とてもを付けるのとでもぬるい、みたいでおかしい？ 」と言葉のニュアンスの違いに疑問を抱き、「それより、最後の、でね」の間の、す、が抜けていると思うのだが」といった語尾の勘違いもありえる話だ。

同じ国の言葉でも、地域によって言葉が変化し、違いが生じるのは自然なことである。寒いところ

では口が回らないから自然にこもった口調になるし、海岸が近くて漁師が多い地域では、仕事柄から身につく荒い言葉遣いが一般的に浸透する。

どの国でも、方言」という概念は存在する。アメリカも移民の国として、様々な国から来ている人々によって多種の方言が生まれ、地域によってイントネーションや言葉が違う。例えば、東海岸はイギリスやアイルランド、スコットランドやイタリアの移民が多く、それらから影響を受けた特徴ある英語が使われる。西部あたりはスペイン人や先住民から影響を受け、また違ったしゃべり方がある。

筆者はハワイ生まれだが、ハワイの英語はアメリカ本土とイントネーションや俗語がだいぶ違って

二人の外国人がいるとしよう。一人は標準の日本語を話す。もう一人はバリバリな土佐弁を話す。どちらに親近感が湧きますか？ 高知県民なら後者と答えていただければありがたい（と言わなくともそう答えてくれるとは思わうが）。このように、「外」の人が「内」の言葉を使うことによって、親近感が湧き、お互いに接近しやすくなる。

また、この方言を理解できるようになれば、「外」の人は自分の周りにいる人々をもっと理解できることになる。土佐弁ミュージカルに参加しているメンバーのほとんどはALIT（英語指導助手）かCIR（国際交流員）の仕事をしている。日本語が完璧にわかるALITやCIRでさえ「仕事場の人、得に年配の方の言っていることがわからない！ こんなに日本語を勉強してきたのに」と嘆くときもある。筆者も、仕事場の人と食事をした後、初めて「おなかあった？」と聞かれたときは、おなかが出ていると言われたのかと思いついてしまい、かなりショックを受けた。高知の人は物事をストレートに言う聞いていたが、ここまでとは。後々、土佐弁で

いて、英語が分からない人でもその違いに気づくほど明白だ。筆者がカリフォルニアへ引越した際、会話はできたものの、カリフォルニアの者ではないことは一言発したらすぐにばれた。

ある場所の言葉を話せなければ、その人は「外」の者になる。日本語を話せない外国人の場合もそう。どんなに日本のことについて勉強をしても、日本語がわからなければ日本人から「内」として見られることは難しい。同様に、日本人が他の国へわたり、その国の言葉を話せなければ、その国の人に「内」として認められることは難しい。

しかし逆に言うと、その場所の言葉を話せたら「内」に入ることができる。それは、言葉を話せたら自動的に「内」に入れるという訳ではないが、言葉を話せないよりは確実に内輪に近づける。旅行番組や本などで他国のことを学んだり、旅行などで他国を肌で感じたりすることはできる。しかし、言葉が分かかって初めてそれ以上に深い交流ができるのだと思う。それなら翻訳や通訳してもらえばいいじゃないか！ と考える人もいるだろうが、仕事で翻訳や通訳を

忘れていたのではないか。外国人に土佐弁のおもしろさを知ってもらうだけでなく、高知県民にも土佐弁のおもしろさを再発見してもらうため、そしてもっといろんな人が高知の「内」に仲間入りできるように、他四十六都道府県に存在しない「土佐弁ミュージカル」を続けていきたい。

四月には十七年目の公演をやるき、見にきてーせ！



してきて、どんなに上手な翻訳者・通訳者でも、言葉のニュアンスを違う国の言葉で100%表現できるかといったら、できないことが多々あると思う。やはり、ある地域を理解するには、自分自身その地域の言葉を習うことが欠かせない。

話は変わるが、「土佐弁ミュージカル」を知っているだろうか。高知で毎年開催されている、外国人による台詞がすべて土佐弁のミュージカルである。GENKI青年会という高知県内のJETプログラム参加者を中心としたボランティア団体が主催していて、台本、音楽、歌詞、振り付け、衣装、セットなど、すべてを自ら手がけている。高知県の地域を回り、九回ほど公演を行う。公演先では募金活動を行い、海外留学を希望する学生の助成金に当てている。

おもしろいコンセプトだが、なぜに外国人が土佐弁でミュージカルをするのだろうか？ それは、簡単に言えば「国際交流」だが、具体的に言えば、高知県民になじみのある土佐弁を使うことによって地域の外国人が「内」に近づくといいことである。



リサ ヤスタケ

一九八六年 アメリカ ハワイ州生まれ 高校一年生のときにカリフォルニア州へ移住。カリフォルニア大学バークレー校 日本語・日本文化専攻を卒業。在籍中、東京の一橋大学に一年間留学。二〇〇九年八月から国際交流員として高知市総務課国際平和係に勤め、二〇一一年八月から高知県文化・国際課に勤務。GENKI青年会の代表として来年の土佐弁ミュージカルに向けて励んでいる。

「象は鼻が長い。」のなぞ

鎌倉の閑静な住宅の座敷で、私達は教授と向かいあって座っていた。

ある手違いから、私と友人はその講義——「国語学概論」の単位を落としていた。——卒業できない。

二人ともすでに就職が決まっていた。あわてふためき、東京駅から列車に乗って、教授の自宅まで駆けつけたのである。

もう三十年も前のことだ。そのとき聞いた言葉は鮮烈に頭に残っている。

「何か紙に」と教授は静かに言った。「私の言う言葉を書きなさい。」二人とも緊張してメモの用意をした。

「象は……」と教授は言った。二人はメモを取った。「鼻が」と教授は続けた。二人ともさらに緊張する。

「長い……」
啞然とした。
象は鼻が長い。

片隅で、その本を見つけた。タイトルが強烈に目に飛び込んできた。

「象は鼻が長い」
まぎれもなく、そう書いていた。軒から差し込む斜陽を浴びて古びた背表紙が、黄金色に輝いて見えた。ひよっとして教授の著書ではないかと思いまじまじと見つめたが、違っていた。著者は「三上章」とあった。当時の私のまったく知らない名前だった。

すぐに買って帰り、むさぼるように読んだ。スリリングで難解な日本語論だった。友人に電話をかけ、コピーを取って分担し合い、レジメをつくって討論し合いながら、内容を読みこんでいった。

私達を読み取ったのは、以下のことだった。
日本語には、主語は存在しない。主語はサブリジェクトという概念は明治維新後、日本人が欧米の文法から取り入れたものだ。そういう欧米の概念を日本語に当てはめて考えること自体が間違っている。

日本語には主語はない。日本語に存在するのは述語だけである。述語以外は、全て述語を補完するための「補語」である。「補語」とは、文字通り述語を補う語だ。「象は鼻が長い。」の述語は「長い」。「象は」も「鼻が」も「補語」なのである。

一瞬教授が冗談を言ったのかと思った。

あまり出席していない講義だった。学生運動が激しかったところで、たいの講義はレポートを出せば単位をもらえた。「国語学概論」のレポートは、二人ともちゃんと出していた。

ところがこの教授は、学生の出欠をきちんとチェックし、それによって単位の認定を行っていた。出席不足のため、私達は単位を落としたのである。

頑固一徹な教授である。まさか冗談を言っているのではないだろう。教授は続けた。「君達は、この文の主語は、何だと思えますか。」

一瞬答えられなかった。
「象は」ですか。それとも「鼻が」ですか。
難しい問題だとはじめて気がついた。考えた。……「長い」のは「鼻が長い」のであって「象は長い」のではない。

これには、驚いた。目の覚める思いだった。

さて、死にもの狂いで書きあげたレポートを持って、鎌倉の教授の家を再びたずねたのは最終期限の日だった。教授は、かなりの時間をかけて二人のレポートを黙読した。「いいでしょう。」と静かに言った。「両君に単位を差し上げましょう。」
「ありがとうございます！」この瞬間、卒業と就職が確定した。

その後が不思議だった。
鎌倉へ来る列車の中でははしゃぎすぎるくらい騒いでいた二人なのに、東京への帰りの電車の中でいきなり黙り込んだ。そのままほとんど口をきかなかつた。

東京駅のプラットホームで、「じゃあ」と言って別れた。
以来三十年になる。彼とは以後一度も会っていない。今ではその名前も忘れてしまった。

だが、今でもときどき思いだす。あの日の奇妙な沈黙と、車窓を眺める彼の物憂いまなざしを。車窓からさし込む西日の中に、金色のほこりが舞っていた。

なぜ二人は黙ったのか。その時はわからなかった。今なら、わかる。あのとき私達は、一つの時代の終わりを感じていたのだ。卒業が決まれば就職する。社会に入る。青春が終

二人は同時に
「鼻が」です。」
と答えていた。
すると教授は突然気迫のこもった声で

「では、『象は』は一体何なんだ！」と叫んでテーブルをたたいた。身が震えるほどの迫力だった。地味で物静かな教授のどこからこういう気迫が湧いてくるのか。私達は震え上がった。そしてこの問答に私たちの卒業がかかっているのだと直感した。

だが、うまく答えられなかった。二人とも黙ったまま、ただあせっていた。

「あなたたちに課題を出します。」
やがて教授は厳かに告げた。

「象は鼻が長い。」というセンテンスの文構造を分析して、四百字詰め原稿用紙二十枚のレポートを書いて持ってきたさい。期間は五日です。納得のいくレポートだったら、考慮いたしましょう。」

帰りの列車で、二人はひきつった笑いの渦の中にいた。小さな祝祭のようだった。一筋の希望は見えたけれど、不安は圧倒的だった。「象は鼻が長い。」の構文論で二十枚のレポート。そんなものが書けようとはとうてい思えなかった。そのため、意味もなく笑いこぼれた。笑うしか

わる。……今は何者でもないけれど、何者にもなることのできる可能性を持っていた時代が終わったのだ。

それを二人は無意識に感じていた。何年か前のことだ。高知の書店で一冊の本を見つけた。「主語を抹殺した男——評伝三上章」——思わず手に取ってページをめくった。学術的な本だった。三上章は市井の言語学者でその学説は生涯に認められなかったと書かれていた。彼の日本語論は死後始めて注目されたものだという。

評伝の著者金谷武洋氏の、あるエピソードも記されていた。
金谷氏はカナダで日本語を教えていたことがある。そのときカナダ人から「私は日本語がわかる。」という文の主語は何ですか。」と聞かれたという。「私は」ですか、「日本語が」ですか？」

この問いに金谷氏はうまく答えられなかった。このときの衝撃から三上章の研究を始め、ついに評伝を書くにいたったという。

これを読んだとき、三十年前の光景が鮮やかに甦った。鎌倉の閑静な住宅の日当たりのよい座敷。早稲田の古本屋で見つけた本の背表紙。東京駅のプラットホームの雑踏の中へ消えていった友人の後ろ姿。
「象は……鼻が長い！」

なかったのである。

友人……といっても、教室で顔を合わせるだけで、特に話をする間柄でもなかった。たまたま同じ窮地に陥っていることがわかって、いっしょに鎌倉まで来たのである。それがまるで十年來の知己でもあるかのよう親密にうちとけ合い、互いの田舎の話や内定した就職先の話に花を咲かせた。

列車が東京駅に近づくころ、二人は急に真剣になった。言語学、国語学、文法学の参考書をとにかく集めよう。そして死ぬ気で勉強して、どんなことをしてでも卒業を勝ち取るうと誓い合った。

それから「血みどろの日々」が始まった。昼は書店、古本屋、図書館をまわり、文法書、言語学書をかたづけしから買いあさり、借りまくった。夜は毎日徹夜で、要約ノートを作った。日本語の「構文」についての代表的な学説をとにかく羅列することでレポートを埋めようとしていた。その合間に、電話で友人と連絡をとり合った。

「日本語の構文って難しいんだな。」と私が嘆くと、
「英語のSVOみたいに簡単にいかねえよな。はじめてわかったよ。」
と友人がせつなく答えた。
ある夕方、早稲田通りの古本屋の

書店の中で思わず声をあげていた。

それにしても、日本語について、あれほど真剣に考えたことはなかったと思う。あのとき学び取ったことを、日本語の読解方法として、今も生徒達に教えている。

難解な文を読み解くときは、まず述語を見つめる。述語は必ず見つかる。なぜなら、日本語は述語を中心にして組み立てられているからだ。述語をみつければ、それを手がかりにして、主語（三上章のいう主格補語）を見つめる。述語から、対応する主語を探り出すことは比較的簡単だ。そして主語と述語の関係がわかれば、文の意味は半分以上わかる。そうすると、修飾——被修飾の関係も、楽に読み取ることができる。こうして文意はほぼ把握できる。

「述語」こそ日本語を読み解く鍵だ。これは、もっと注目されてよい事実だと確信している。

ひろい まもる

一九五四年 高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

MOTTAINAIキッズフリーマーケット

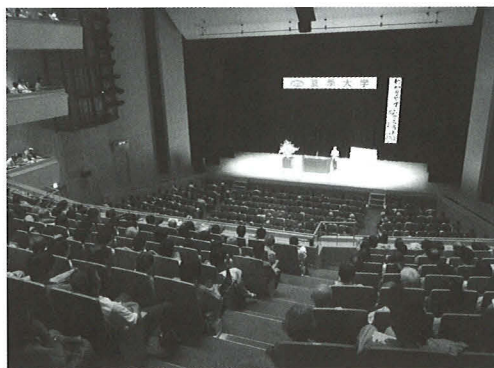
7月10日(日)、かるぽーと7階市民ギャラリー第一展示室にて、東京で大人気の子供たちだけのイベントが高知で初開催。このフリーマーケット、お店を出すのは小学校3年生～6年生。お客さんも小学校1年生～6年生の子供たちに限定し、保護者の方は周囲から見守るだけといった子供の自主性を育む目的で行いました。



子供たちは、実際のお金を使ってやりとりすることで、お金の大切さを身をもって知ることができ、収入を得るといことがどれだけ大変かということを知りました。また、身の回りで必要なくなった物を誰かに使ってもらうことで物の大切さを学び、大声を出して笑顔でお客さんと呼び込みPRすることでコミュニケーション力を育むこともできました。周りで見ている保護者の方もときどきしながら子供たちを見守り、子供の様子をカメラにおさめようという姿があちこちで見受けられました。

終了後、子供たちには簡単な収支報告書と感想文を書いてもらいました。「最初は恥ずかしかったけど、徐々に慣れてきて大声でお客さんと呼べるようになりました」「今日はあんまり売れなかったけど、また次もやりたいです」等と何かを学び、多くの子供たちが楽しい一時を過ごしました。次回も、乞うご期待！

第61回 高知市夏季大学



高知市の夏の風物詩ともいわれる夏季大学。第61回を迎える本年は、7月25日(月)から8月5日(金)までの土日を除く10日間、かるぽーと大ホールで、講師として小山明子、鳥越俊太郎、川口淳一郎、池上彰、杉本節子、鷺田清一、立川志らく、岩崎夏海、森本敏、熊谷喜八の各氏をお招きし、連日盛況のうちに開催されました。

特に、がん患者として生きる鳥越氏の「がんを決して後ろ向きにとらえないで」という呼び掛け、「はやぶさ」のプロジェクトを成功に導いた川口氏の「アイデアで変革を」という意気込み、池上氏の「わかりやすく伝えるためには、問題意識を持って新聞等を読み、説明することで本当の学びの楽しさが味わえる」、などに満席の受講者はそれぞれ頷いていました。

また、鷺田氏は深い思索と現場を結びつける臨床哲学からのお話で、高い知を感じさせてくれるなど、各氏ともそれぞれのご専門の立場からの充実した講演を聴くことができ、暑い夏のひとときを有意義に過ごすことができました。

BACH

Johann Sebastian Bach
1685-1750

京都バッハ合唱団【高知公演】

京都を拠点にバッハを中心とする教会音楽の演奏を行う「京都バッハ合唱団」の高知公演が7月2日(土)大ホールで行われました。2003年に大阪チェンバーオーケストラと合同で「バッハアカデミー関西」とし

て来高してから2度目の高知公演となる今回は、京都バッハ合唱団の真髄であるア・カペラ曲を中心に演奏。バッハの「モテット第1番 主に向かって新しい歌を歌え」で幕を開けた演奏会は、続いていくつものパートから始まる不協和音がいつのまにかハーモニーに変わっていく「Immortal Bach」ではその演奏の完成度の高さに観客からため息が漏れました。第2部、第3部は古今東西のア・カペラ曲を、最後の第4部では、地元の有志による「高知であいの春合唱団」との合同演奏による合唱組曲「四万十川」から「雲の上」と「川狩」、そして「唱歌の四季」全5曲では迫力ある演奏が披露されました。

第9回 詩のボクシング

Japan Reading Boxing Association Official Poetry Boxing

高知大会予選会開催
7月9日(土) 午後1時～ 小ホール

詩、手紙、台本など自作の文章を自分の声で朗読しあい、対戦相手と戦って勝ち抜いていく「詩のボクシング」。2年ぶりの予選開催に16歳から53歳まで、新人11人を含む21人の参加があった。



常連組の手慣れた作品朗読から始まった予選であるが、初めて参加する選手も多く、必死に自分の作品世界を伝えようとする姿が初々しくもあった。また今回から3人1組で朗読する「団体戦」が導入され、飛び入り2組を含む4組が参加した。被虐のスタイルで大いに会場を笑わせた朗読や、原発事故を扱ったもの、高校生活の一コマを切り取ったもの、自分のアルバイト先での出来事を漫談風にしゃべるものなど、テーマ、表現スタイルも様々で、個性あふれる楽しい予選会となった。

審査の結果、個人戦の16人と団体戦参加4組が予選を通過し、本大会への出場を決めた。予選通過者は審査員長の楠かつのり氏(日本朗読ボクシング協会代表)から、自分の言葉をどのように他者(審査員や観客)に届けるのか、そこを工夫することが大切であるというアドバイスを受けていた。

50人前後集まった観客の中には、高知大会初代チャンピオンも顔を見せていた。当時中学3年生だったチャンピオンも二十代半ばの好青年になるなど、詩のボクシング高知大会が刻んできた10年の歳月を感じさせる予選会でもあった。

【本大会】平成23年9月24日(土) 午後1時ゴング!
高知市文化プラザかるぽーと 小ホール
前売り 一般 1,000円(当日 1,300円) 高校生以下 500円(当日 800円)

線路は続くよどこまでも



CM・演劇の他、ワハハ本舗や吉本興業でも活躍するアレンジャー・杉浦哲郎と、実力派ヴァイオリニスト・岡田鉄平による強力ユニット高知初公演!

絶対音感を持つ二人が、クラシックの技法を駆使し、バトカーや救急車のサイレン、踏切音からFAXの送受信音までを演奏しちゃう!!

よしもと劇場でもトリもつとめた異色のデュオが、硬いクラシック

のイメージを取り払い、誰もが楽しめるエンタテインメントをお届けします。音楽同様、笑いにも真剣に取り組んだステージは、まるでクラシックの枠を飛び越えたバラエティ・ショー!!!

日時：10月23日(日)13:30 開場 14:00 開演
会場：高知市文化プラザかるぽーと大ホール
料金：全席自由 一般 2,000円 (当日2,500円) 高校生以下 1,000円 (当日1,500円)
お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団 088-883-5071

風伯

誤解を招く

許可を求める気持ちもなく、ただ強引に「その質問には答えられない」という意思表示を示している。もうすこし控えめに発言してもらいたいものだ。
まあこれなどは罪が軽いので、目くじらを立てるほどのこともないが、最近目に余るのがたとえばシンポジウムなどで電力会社の「やらせ」を「誤解を招く

新聞などを見ていると、最近とくにへんな日本語が目につく。「控えさせていたたく」というのもいさからださうか、頻繁に使われたら、「すべらない敬語」(新潮新書)によれば「させていたたく」は「自らをへりくだり、恩恵と許可を与えてくれる相手を高めて敬意を表す言葉」とあるが、いまはもう敬意も

「行為」であったと「謝罪」するいい方である。新聞には「謝罪」と出ているが、どこが謝罪なのだろう。どう考えても謝罪しているようには思えない。
「誤解を招く」というのは、一般国民が真実を見失ってきつと「誤解をするであろう」とでもいいたいのだろうか。しかし、そうはいかない。われわれが誤解をするのではなく、「やらせ」は事実なのだから、それを「誤解を招く行為」などと表面を取り繕うのはおかしい。こちらは誤解などしない。事実だけを見ているのだ。
ジャーナリストの側も、こうした一般国民をバカにした発言を平気で「謝罪した」と書くのだから呆れてしまう。そもそも今回の津波や原発のことにしても、マスコミから建設的な発言はほとんどない。政府を批判して却って不安を煽り、一見「庶民の味方」を装う態度は何とかならないものか。
(霧)



パガニーニ合奏団

東京芸術大学名誉教授・山岡耕彦氏率いる弦楽合奏団。ヴァイオリンの鬼才パガニーニの名を冠し、演奏会では必ず彼の曲を取り入れるというコンセプトで活動。東京芸術大学出身の若手アーティスト11名による息の合った演奏をお楽しみください。

日時：9月14日(水)
開場 18:00 開演 18:30

会場：高知市文化プラザ
かるぽーと大ホール

料金：全席自由
一般 2,500円
高校生以下 1,000円
(当日券は500円増し)
※未就学児の入場はご遠慮ください。

【お問い合わせ】
(財)高知市文化振興事業団
088-883-5071

今号の表紙

「おつきみ」 見元 佑衣

九月らしい風景をイメージしています。九月はお月見の時期なので月とスキを描きました。色合いは夏から秋にかけて変化して、夜が少し肌寒くなってきているイメージです。

(みもと ゆい/
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)



高知を撮る

第27回写真コンテスト入賞作品

えいもん作るぞ!

(平成22年5月 黒潮町入野海岸)

竹村 悦子

Tシャツ展を支える真剣なスタッフの方の素晴らしい浜のアート作りの技です!

小学校の運動会と言えは春や秋に開催するが、高校や地域の体育祭・運動会となるとやはり主流は秋。自分自身が競技を楽しむこともあれば、子どもたちの体育祭を見に行つてスポーツの秋を満喫することもあるだろう。アスリート一家の我家では、秋の体育祭は、年間最大のイベント。特に長女の通う学校の席取り争戦は、運動会の本番以上の白熱した闘いが毎年繰り広げられる。グラウンドの開門は朝六時。その時点では、グラウンドを取り巻く長蛇の列ができています。そんなこととはつゆ知らず、長女が中一に入学したばかりの年、開門ギリギリに到着してド肝を抜かれた。まるで、有名アーティストのコンサートか人気商品の発売日と見紛う賑わい。以来毎年、家を出発する時間が三十分くらいずつ早くなり、昨年はとうとう三時半。一万円もするLEDの読書灯を待ち時間のために買って、小雨の中心たすら本を読んで待った。

熱き戦い



風俗歳時記

ぶことは曲芸に近いものがある。野宿も運搬も今後の訓練次第。訓練がうまくいいたら、今年が一番乗りを狙うとするか。
自分が熱くなれることは人それぞれ。この熱い戦いが終わると、土佐路も我が家もやっと秋らしくなってくる。
(立花香)

かく言う私も、今年も待機用新兵器を手に入れた。フランス製のチェアベッドは、「ハンモックのような寝心地を約束するリクライニングがあなたを癒します。」が歌い文句。出費二万円也!しかし困ったことに少々重い。これを自転車に乗せて運ぶことは曲芸に近いものがある。野宿も運搬も今後の訓練次第。訓練がうまくいいたら、今年が一番乗りを狙うとするか。
自分が熱くなれることは人それぞれ。この熱い戦いが終わると、土佐路も我が家もやっと秋らしくなってくる。
(立花香)

グラウンドの前に住む人は、夜中の二時に、「まさか並んでいないだろう」とカーテン越しに覗くと、すでに数人が並んでいて慌てて列に加わったのだとか。ちなみに昨年の一番乗りは深夜一時。体育祭の終了後、ママ友に聞くと、「来年は夜中の0時に来るわ」だって。アンビリーバー!

(財)高知市文化振興事業団 主催事業のご案内

文化高知

No.163
2011年(平成23年)

9月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780-8809 高知市九反田2番1号
TEL(0)888-315071/郵便振替01680015-114869

CUL-PORT * ART NPO TACO

ホリカワアートミーティング

Final!!

笑顔がいっぱい、アートのおまつり。

10回分の「ありがとう!」

PROGRAM

- ・アートフリーマーケットかるぼいち
- ・顔出しお面をつくろう!
- ・「マイはし」をつくろう!
- ・カヌーで Go! Go!
- ・アフリカ音楽をたのしもう!

2011.9.25 Sun 10:00~17:00

高知市文化プラザかるぼーと 前広場 ※雨天時は7階市民ギャラリーにて開催

■主催：(財)高知市文化振興事業団・特定非営利活動法人ART NPO TACO

■協力：高知市文化プラザ共同企業体・Plastik/o

■お申し込み・お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団 088-883-5071 www.bunkaplaza.or.jp



<http://www.kfca.jp>

e-mail kikaku@kfca.jp